

Johann Wolfgang von Goethe

WINCKELMANN

Mit Anmerkungen und erläutert

von

Teruyasu Yamato

und

Masanori Hayashi

SANSYUSYA VERLAG

Johann Joachim Winckelmann 年譜

- 1717 12月9日, Altmark の小都市 Stendahl に貧しい靴職人の子として生まれる.
- 1738-40 Halle大学神学科在学. 美学者 A. G. Baumgarten の講義聴講.
- 1741 5月 Jena 大学入学. 医学、数学、近代語学を修める.
- 1742 Hadmersleben において家庭教師. F. W. P. Lamprecht を識る.
- 1743-48 Altmark の Seehausen のラテン語学校に奉職.
- 1748-54 Dresden 近郊の Nöthnitz の Bünaу 伯の図書館に勤務. 伯のドイツ史編纂の助手を勤めるかたわら、歴史学、ギリシア文学、近世美術論を研究.
- 1754 6月1日, カトリックへ改宗.
10月, Dresden 市内へ移り, 画家 Oeser のもとで美術の研究.
- 1755 5月, 処女作『彫刻および絵画におけるギリシア美術品の模倣について』を出版.
9月24日, Dresden 宮廷の官費留学生として美術研究のためローマへ出発. 11月18日ローマに到着, 以後ローマに定住.
画家 Raphael Mengs を識る.
- 1756 枢機卿 Passionei の図書係.
- 1757-58 枢機卿 Archinto の図書顧問.
- 1758 2月~5月, ナポリ, ポルティチ、ヘルクラネウム, ポムペイを訪問.
9月より翌年6月までフローレンスの Stosch 男爵家で, その古代美術品コレクションの目録作成に従事.
- 1759 6月, 枢機卿 Albani の図書, 古美術品収集顧問となる.
『美術品研究回顧』, 『美術品における優美について』, 『ベルヴェデーレのトルソーの記述』を出版.
- 1761 『古代の建築についての注解』を出版.
- 1762 『ヘルクラネウムの古代遺跡についての書簡』を出版.

- 1763 ローマ地方古美術保存委員長、ヴァチカン図書館書記に任命される。
- 1764 『古代美術史』、『最近のヘルクラネウムの発掘に関する報告』を出版。
- 1767 『未公開の古代の記念碑』
- 1768 4月10日、ローマを出発、ドイツへの旅行の途につく。ミュンヘン、ウィーンで宮廷の歓迎を受ける。旅程を変更し、ローマへの帰途につき、6月1日トリエスト到着。6月8日、強盗 Arcangeli に殺害される。

ゲーテ『ヴィンケルマン論』解説

I. 成立事情

青年時代の友人 Hieronymus Dietrich Berends (Berendis) にあてたヴィンケルマンの27通の書簡は、Berendsの死後ヴァイマルの大公妃 Anna Amalieの手に帰していたが、その書簡の存在を知ったゲーテは、偉大なヴィンケルマンの生涯と業績を広く世に知らせるために、1799年以来その編集・出版の計画を抱いていた。Heinrich Meyer (『18世紀美術史草案』)、Friedrich August Wolf (『文献学者としてのヴィンケルマン』)等の寄稿を得て、おおよその体裁が整ったのは1804年であり、最後に1804年暮から1805年春にかけてゲーテ自身の手になるヴィンケルマンの性格と生涯のスケッチ(本作品)が書き上げられ、その年の5月チュービンゲンのコッタ書店より『ヴィンケルマンとその世紀 ゲーテ編 書簡と論文 (Winckelmann und sein Jahrhundert. In Briefen und Aufsätzen herausgegeben von J. W. von Goethe)』という形で世に出たのである。

II. 歴史的背景と意義

「終熄しつつあったバロックとロココの文化にとどめの一撃を加えた、J. J. ルソーと並ぶヨーロッパ文化のもう一人の革命家」(Ludwig Curtius)とも称せられるヴィンケルマンは、彼がドイツならびに広くヨーロッパ文化全体に与えた、広汎かつ深刻な影響にもかかわらず、従来わが国では顧みられることが比較的少なかった人物の1人である。それは、彼の残した目に見える業績が、古代美術という比較的狭い専門領域に限られていたこともあるだろうが、むしろヴィンケルマンの出現を促した、当時のドイツの精神的な土壌への正当な視点を欠いていたことが、彼の業績の正しい評価を妨げていたためと思われる。ヴィンケルマンが、18世紀ドイツの精神世界の天空に鮮やかな光芒を描きつつ、クロップシュトゥック、レッシングと共に、ドイツ文化の新たな偉大な時代を切り拓き得たのは、何故であったのか。その理由を知るためには、当時のドイツの思想的・文化史的背景の理解が前提となるだろう。

当時のドイツの古典古代 (Antike) に対する関係は、時代の精神状況を

集約的に映し出している鏡として、フランス、イギリスの場合と比較してはるかに複雑な事情を内包していた。例えばコルネイユ、ラシーヌ、ラ・フォンテーヌ等を有するフランス、またシェイクスピア、ドライデン、ジョンソン、ポープ等を有するイギリスには、すでに自国文化にまで血肉化した強固な古典古代の伝統があり、むしろ伝統が規範化することによるその硬直化にこそ真の問題があった。17世紀フランスのアカデミーを騒がせた「古代人・近代人優劣論争」は、伝統と進歩との対決であるよりは、硬直化した古典古代の伝統にいかにか新しい生命の息吹きを吹き込むかをめぐっての論争であったと解すべきであろう。

ところで、ゲーテが美術の師エーザー (Oeser) を通じて、ヴィンケルマンの名に初めて接したのは、彼がライプツィヒの学生の頃であった。当時ライプツィヒ大学にはゴットシェート (Gottsched) がいた。ゴットシェートは、ドイツ・バロック文学の過度で、不自然な技巧に偏したマニエリスムに対して、啓蒙主義 (Aufklärung) の立場から、フランス古典主義 (Klassizismus) にもっぱら範をとりつつ、彼の規範詩学を打ち立てた。そして彼の主著『批判的詩学試論 (Versuch einer kritischen Dichtkunst)』(1730) は、18世紀前半のドイツにおいてもっとも大きな影響力を行使した書物の一冊となった。ボワロー (Boileau) に依拠したその詩学は、合理主義の原則に立脚しつつ、フランス人による古典古代の模倣の再模倣を主張するものであった。しかし、ゴットシェートのこの一方的にフランスに偏した、合理主義的詩学は、当時次第にきざしつつあったドイツの民族的な自覚の動きに出会って、反撥と嫌悪を引き起すこととなった。

それはフランス人の手を経ない、真の古典古代にじかに接しようとする動き、フランス古典主義が範とするローマの古典から、さらに遡ってギリシアの古典へと向かう動きとなって現われた。例えばクロップシュトックは、ゴットシェートの推奨するアレクサンドリア詩格 (それはフランス古典劇の詩格でもある) の使用を斥けて、古代ギリシアの無韻詩格を採用した。またレッシングの『ハンブルク演劇論 (Hamburgische Dramaturgie)』(1767-69) は、フランス古典主義風のアリストテレス解釈、そこから導き出された規則 (例えば三・一致の法則) の重視を捨てて、アリストテレスの原典に今一度立ち帰り、そこから創作の原理を引き出そうとするものであった。そして、このフランス風、啓蒙主義風

に歪曲されない古典古代への回帰の動き、すなわちロココのパリから古代のローマへ、ローマからさらにギリシアへという源泉への回帰の動きは、自然への回帰の動きと歩調を合わせつつ、そのうねりがドイツ民族の精神と歴史の固有性の自覚、敬虔主義によって促された、魂の深みへと投げかけられた視線に触れたとき、シュトゥルム・ウント・ドラングとなって爆発することとなったのである。

ヴィンケルマンが、若きゲーテにとって、また総じてドイツの精神世界にとって、一大事件となった由縁は、このような歴史的な文脈において理解されねばならないのである。マイネッケ (Meinecke) が『歴史主義の成立 (Die Entstehung des Historismus)』(邦訳、筑摩叢書104, 105, 菊盛英夫 麻生建訳)の中で、「ヴィンケルマンが行なったギリシア美術への感情移入は、すでにいたるところで始まりつつあったロマン＝フランス的法則精神に対する反動と関連するゲルマン精神のしわざであった」(邦訳105:17頁)と述べているのはそのことである。

若きゲーテはある書簡の中で、「パリは私の学校となるはずですが、しかしローマは私の大学となるはずですが。(Paris soll meine Schule sein, Rom meine Universität)」と書いた。当時、一般のローマへの留学熱、旅行熱の過熱が証明している通り、ローマは世界史と教養 (Bildung) の象徴であった。文化の辺境であるドイツの一学徒が、そのローマで収めた赫々たる成功と名声が、ドイツの知的な若者の心をいかに鼓舞し、熱狂させたかを、われわれは『詩と真実 (Dichtung und Wahrheit)』の記述から十分に窺い知ることができるのである。

ヴィンケルマンの処女作『絵画および彫刻におけるギリシア美術品の模倣について』は、従来からしばしば唱えられてきた古代人模倣の原則を改めて主張したものであるが、その言葉が人々の心を深く揺り動かしたのは、そこに言う模倣が、ギリシア芸術の単なる外面的な模倣ではなく、ギリシア人の精神の深奥に踏み込み、そこから新たな創造の力をくみ取することを意味していたからである。『古代芸術史』に示された、ヴィンケルマンの芸術史の理論もまた、そこに眼目があった。最高の芸術作品を生み出した当の時代に立ち帰り、そこに身を置くことが、芸術理解の根本だとするのである。

ゲーテはヴィンケルマンの芸術理論から多くを学んだ。しかし、何よりもゲーテの心を深く捉えたのは、ヴィンケルマンの人間そのものであ

った。ヴィンケルマンはその著作の中で、ギリシア芸術の単なる外面的模倣よりは、むしろ精神と創造の核心において現代のギリシア人たることを求めたのであり、そして事実また自身の生き方において、それを身をもって実践したのであった。ゲーテはヴィンケルマンの生涯の中に古代人の再現を見、古典古代の精神の、ドイツの土壌での真の血肉化を見たのである。そして、自己の全教養の土台がここに置かれるべきこと、将来のドイツ文化がこの礎石の上に築かれるべきことを知ったのである。

後年ゲーテがエッカーマンに語った「彼（ヴィンケルマン）を読むことで、人は何かを学ぶのではなく、何かになるのだ（Man lernt nichts, wenn man ihn liest, aber man wird etwas.）」（den 16. Feb. 1827）という言葉は、彼がヴィンケルマンを単なる理論の問題としてではなく、自己の、またドイツ文化全体の生き方の問題として受けとめたことを語っている。そして、この視点は『ヴィンケルマン論』においても終始貫かれている。

ゲーテは、詩作の経験と長年にわたる自然研究の積み重ねの後に、イタリア体験を経てヴィンケルマンから与えられた導きの糸を手探りしつつ、いわゆる「古典期（Hochklassik）」への道を辿るのである。

ところで、『ヴィンケルマン論』の書かれた1800年前後の精神的背景を知ることは、この書を理解するための不可欠の条件である。ゲーテのいわゆる「古典主義の時代」(klassische Periode) (1788-1806/7年) は、ロマン主義者 (Romantiker) と呼ばれる一群の若い世代の文学活動が活潑化した時期に一致している。彼らはドイツ観念論哲学——シェリング (Schelling)、フィヒテ (Fichte) の主観性の哲学——を背景に、敬虔主義に涵養された宗教的心情と感受性とを以って、幽暗な内面世界に沈潜し、現実の世界よりも夢幻の世界に、此岸の有限性よりも彼岸の無限性により多く眼を向け、ヴィンケルマン、レッシング、ゲーテ、シラー等によって呈示された明澄な古典古代の世界に背を向け、ゲルマン民族の過去の世界——中世——に憧憬を抱く人々であった。このロマン派運動の綱領の書とも目すべきヴァッケンローダー (W. Wackenroder) の『芸術を愛する一修道僧の心情の吐露 (Herzensergießungen eines kunstliebenden Klosterbruders)』は、1797年に世に出ている。1798年にはティーク (L. Tieck) の『フランツ・シュテルンバルトの放浪 (Franz Sternbalds Wanderungen)』が³、ゲーテがヴィンケルマン書簡集の出版を思い立った1799

年にはノヴァーリス (Novalis) の『キリスト教とヨーロッパ (Christenheit oder Europa)』が、また F. シュレーゲル (F. Schlegel) の『ルチンデ (Lucinde)』が出版されている。

ゲーテは、これらロマン主義者たちの反古典古代の動きを、後退する時代、解体する時代の予兆として受けとめ、彼らの現実を遊離した病的な性格を洞察し、彼らを念頭に置いての、事改めての古典主義のマニフェストとして、またロマン派運動に対する「戦いの書」として、彼の『ヴィンケルマン論』を構想したと考えられるのである。文中、古代人に対比して論じられている近代人が暗にロマン主義者たちを指していることは明らかである。

『ヴィンケルマン論』執筆の1804年暮から1805年春にかけての時期、ゲーテは盟友シラーの病状の悪化、そしてまた自身も腎臓病のため一時は死線をさまようような状態の下で、肉体的・精神的な力の極度の衰えを意識しつつ筆を執った。そして、シラーにあてた1805年4月20日付の書簡の中で、ゲーテは『ヴィンケルマン論』に関連して „in doloribus pinxit“ (「苦悩の下にて描かれたる」と記した。しかし、われわれはここに „in doloribus pinxit“ の痕跡をいささかも窺うことはできない。簡潔にして雄渾、情熱と余裕、時には皮肉をまじえ、時には散文で書かれた詩にまで高揚している文章は、巨匠の自在の精神の氣息を伝えて余すところがないのである。

(なお、本テキストの翻刻に際して底本として用いたのは、Goethe: Werke (Hamburger Ausgabe), Bd. 12. Schriften zur Kunst. 9., neubearbeitete Aufl. München 1981 である。)

WINCKELMANN

Einleitung

Das Andenken merkwürdiger Menschen, so wie die Gegenwart bedeutender Kunstwerke, regt von Zeit zu Zeit den Geist der Betrachtung auf.* Beide stehen da als Vermächtnisse für jede Generation, in Taten und Nachruhm jene,* diese*
5 wirklich erhalten als unaussprechliche Wesen. Jeder Einsichtige weiß recht gut, daß nur das Anschauen* ihres* besonderen Ganzen einen wahren Wert hätte; und doch versucht man immer aufs neue, durch Reflexion und Wort ihnen etwas abzugewinnen.

10 Hiezu werden wir besonders aufgereizt, wenn etwas Neues* entdeckt und bekannt wird, das auf solche Gegenstände Bezug hat; und so wird man unsre erneuerte Betrachtung über Winckelmann, seinen Charakter und sein Geleistetes in dem Augenblicke* schicklich finden, da die eben jetzt herausge-
15 gebenen Briefe* über seine Denkweise und Zustände ein lebhafteres Licht verbreiten.

Eintritt

Wenn die Natur gewöhnlichen Menschen die köstliche Mitgift nicht versagt, ich meine jenen lebhaften Trieb, von Kindheit an die äußere Welt mit Lust zu ergreifen, sie kennen
20 zu lernen, sich mit ihr in Verhältnis zu setzen, mit ihr verbunden ein Ganzes zu bilden, so haben vorzügliche Geister öfters die Eigenheit, eine Art von Scheu vor dem wirklichen Leben zu empfinden, sich in sich selbst eine eigene Welt zu

erschaffen und auf diese Weise das Vortrefflichste nach innen bezüglich* zu leisten.

Findet sich* hingegen in besonders begabten Menschen jenes gemeinsame Bedürfnis, eifrig zu allem, was die Natur in sie gelegt hat, auch in der äußeren Welt die antwortenden 5 Gegenbilder* zu suchen und dadurch das Innere völlig zum Ganzen und Gewissen zu steigern, so kann man versichert sein, daß auch so ein* für Welt und Nachwelt höchst erfreuliches Dasein sich ausbilden werde.

Unser Winckelmann war von dieser Art. In ihn hatte die 10 Natur gelegt, was den Mann macht und ziert. Dagegen verwendete er sein ganzes Leben, ein ihm Gemäßes, Treffliches und Würdiges im Menschen und in der Kunst, die sich vorzüglich mit dem Menschen beschäftigt,* aufzusuchen.

Eine niedrige Kindheit,* unzulänglicher Unterricht in der 15 Jugend, zerrissene, zerstreute Studien im Jünglingsalter, der Druck eines Schulamtes, und was in einer solchen Laufbahn Ängstliches und Beschwerliches* erfahren wird, hatte er mit vielen andern geduldet. Er war dreißig Jahr alt geworden, ohne irgendeine Gunst des Schicksals genossen zu haben; aber in 20 ihm selbst lagen die Keime eines wünschenswerten und möglichen Glücks.

Wir finden schon in diesen seinen traurigen Zeiten die Spur jener Forderung, sich von den Zuständen der Welt mit eigenen Augen zu überzeugen, zwar dunkel und verworren, doch 25 entschieden genug ausgesprochen. Einige nicht genugsam überlegte Versuche, fremde Länder zu sehen, mißglückten ihm. Er träumte sich eine Reise nach Ägypten; er begab sich auf den Weg nach Frankreich: unvorhergesehene Hindernisse*

wiesen ihn zurück. Besser geleitet von seinem Genius, ergriff er endlich die Idee, sich nach Rom durchzudrängen. Er fühlte, wie sehr ihm ein solcher Aufenthalt gemäß sei. Dies war kein Einfall, kein Gedanke mehr, es war ein entschiedener Plan, dem er mit Klugheit und Festigkeit entgegenging.

Antikes*

Der Mensch vermag gar manches durch zweckmäßigen Gebrauch einzelner Kräfte, er vermag das Außerordentliche durch Verbindung mehrerer Fähigkeiten; aber das Einzige, ganz Unerwartete leistet er nur, wenn sich die sämtlichen
10 Eigenschaften gleichmäßig in ihm vereinigen. Das letzte war das glückliche Los der Alten, besonders der Griechen in ihrer besten Zeit; auf die beiden ersten sind wir Neuern vom Schicksal angewiesen.

Wenn die gesunde Natur des Menschen als ein Ganzes
15 wirkt, wenn er sich in der Welt als in einem großen, schönen, würdigen und wertigen Ganzen fühlt, wenn das harmonische Behagen ihm ein reines, freies Entzücken gewährt — dann würde das Weltall, wenn es sich selbst empfinden könnte, als an sein Ziel gelangt* aufjauchzen und den Gipfel des eigenen
20 Werdens und Wesens* bewundern. Denn wozu dient alle der Aufwand von Sonnen und Planeten und Monden, von Sternen und Milchstraßen, von Kometen und Nebelflecken, von gewordenen und werdenden Welten, wenn sich nicht zuletzt ein glücklicher Mensch unbewußt seines Daseins erfreut?

25 Wirft sich der Neuere,* wie es uns eben jetzt ergangen, fast

bei jeder Betrachtung ins Unendliche, um zuletzt, wenn es ihm glückt, auf einen beschränkten Punkt wieder zurück-zukehren,* so fühlten die Alten ohne weitem Umweg sogleich ihre einzige Beharrlichkeit innerhalb der lieblichen Grenzen der schönen Welt. Hieher waren sie gesetzt, hiezu berufen, 5 hier fand ihre Tätigkeit Raum, ihre Leidenschaft Gegenstand und Nahrung.

Warum sind ihre Dichter und Geschichtschreiber die Bewunderung des Einsichtigen, die Verzweiflung des Nach-eifernden, als weil* jene handelnden Personen,* die aufgeführt 10 werden, an ihrem eigenen Selbst, an dem engen Kreise ihres Vaterlandes, an der bezeichneten Bahn des eigenen sowohl als des mitbürgerlichen Lebens einen so tiefen Anteil nahmen, mit allem Sinn, aller Neigung, aller Kraft auf die Gegenwart wirkten; daher es einem gleichgesinnten Darsteller nicht 15 schwer fallen konnte, eine solche Gegenwart zu verewigen.

Das, was geschah, hatte für sie den einzigen Wert, so wie für uns nur dasjenige, was gedacht oder empfunden worden, einen Wert zu gewinnen scheint.*

Nach einerlei Weise lebte der Dichter in seiner Einbil- 20 dungskraft, der Geschichtschreiber in der politischen, der Forscher in der natürlichen Welt. Alle hielten sich am Nächsten, Wahren, Wirklichen fest, und selbst ihre Phantasiebilder haben Knochen und Mark. Der Mensch und das Menschliche wurden am wertesten geachtet, und alle seine innern, seine 25 äußern Verhältnisse zur Welt mit so großem Sinne dargestellt als angeschaut. Noch fand sich das Gefühl, die Betrachtung nicht zerstückelt, noch war jene kaum heilbare Trennung in der gesunden Menschenkraft nicht vorgegangen.

Aber nicht allein das Glück zu genießen, sondern auch das Unglück zu ertragen, waren jene Naturen höchlich geschickt: denn wie die gesunde Faser dem Übel widerstrebt und bei jedem krankhaften Anfall sich eilig wiederherstellt, so vermag
5 der jenen eigene gesunde Sinn* sich gegen innern und äußern Unfall geschwind und leicht wiederherzustellen. Eine solche antike Natur war, insofern man es nur von einem unsrer Zeitgenossen behaupten kann, in Winckelmann wieder erschienen, die gleich anfangs ihr ungeheures Probestück
10 ablegte, daß sie durch dreißig Jahre Niedrigkeit, Unbehagen und Kummer nicht gebändigt, nicht aus dem Wege gerückt, nicht abgestumpft werden konnte. Sobald er nur zu einer ihm gemäßen Freiheit gelangte, erscheint er ganz und abgeschlossen, völlig im antiken Sinne. Angewiesen auf Tätigkeit,
15 Genuß und Entbehrung, Freude und Leid, Besitz und Verlust, Erhebung und Erniedrigung, und in solchem seltsamen Wechsel immer mit dem schönen Boden zufrieden, auf dem uns ein so veränderliches Schicksal heimsucht.

Hatte er nun im Leben einen wirklich altertümlichen Geist,
20 so blieb ihm derselbe auch in seinen Studien getreu. Doch wenn bei Behandlung der Wissenschaften im Großen und Breiten die Alten sich schon in einer gewissen peinlichen Lage befanden, indem zur Erfassung der mannigfaltigen außer-
menschlichen Gegenstände eine Zerteilung der Kräfte und
25 Fähigkeiten, eine Zerstückelung der Einheit fast unerläßlich ist, so hat ein Neuerer im ähnlichen Falle ein noch gewagteres Spiel, indem er bei der einzelnen Ausarbeitung des mannigfaltigen Wißbaren sich zu zerstreuen,* in unzusammenhängenden Kenntnissen sich zu verlieren* in Gefahr kömmt,*

注

- 2 3 **aufregen** : = anspornen, antreiben, auffordern. (例) Durch Winckelmann sind wir dringend aufgeregt, die Epoche zu sondern. (イタリア紀行, 1787, 1, 28.)
- 4 **jene** : merkwürdige Menschen.
diese : bedeutende Kunstwerke.
- 6 **Anschau** : Anschauen, 感覚一見ること (Schauen) を通して, 対象の本質を全体的に直観すること.
- 6 **ihr** : beide を指す.
- 10 **etwas Neues** : 一般的な表現だが, 暗に15行目の Briefe を指す.
- 14 **in dem Augenblick** は後の関係副詞 da の先行詞.
- 15 **Briefe** : 「解説」参照.
- 3 2 **nach innen bezüglich** : 「内面に関連して」の意. bezüglich = sich beziehend.
- 3 **Findet sich ...** : wenn に導かれる副文と同じ.
- 6 **die antwortenden Gegenbilder** : ここでの antworten は entsprechen, übereinstimmen, korrespondieren の意.
- 8 **ein** は Dasein の冠詞. 間の句は冠飾句.
- 14 **in der Kunst, die sich vorzüglich mit dem Menschen beschäftigt** : 「とりわけ人間を対象として扱う芸術」とは彫刻のことである.
- 15 **Eine niedrige Kindheit** : 「みじめな子供時代」の意. 年譜参照.
- 18 **Ängstliches und Beschwerliches** : 1格で was と同格. als を補って考えてもよい.
- 29 **unvorhergesehene Hindernisse** : 1741年イェナ大学在学中にパリへの旅を企て, 「所蔵品を売払って服装を調べ, 巴里に向って出発するが, 道中どの僧院でも裕福に見られて宿泊を断られ, ために旅費が嵩み遂にマイン河畔フランクフルトの付近まで来て無一文となり引返した」とも, 「佛蘭西の軍隊が青年を徴集しながらバイエルンに向け進軍して来るのに遭ひ逃げ帰ったのだとも言われている。」(井島勉著『コンケルマン』 弘文堂 昭和11年 20ページ)

[Antikes] この作品全体の中心をなす章である. ここでゲーテは, ヴィ

ンケルマンの中に再現された古代人を、近代人との対比において、理想の人間像として称揚している。古代人とは、ゲーテによれば、人間のさまざまな特性・能力のすべてが各人の内部で相互に均一に調和的に結び付き、一個の有機的な全体として作用する人間であり、また彼は、近代人のように無限定な思考や感情にやみくもに身をゆだねるのではなく、あくまでも〈美しい世界の好ましい限定の内部〉に踏みとどまり、〈現在〉という時に、自己の情熱と行動のすべてを以って働きかけ、そこに同時に人間の真の自由を見出すのである。

- 4 19 als an sein Ziel gelangt: 「自己の目標に到達したとして」の意。
20 den Gipfel des eigenen Werdens und Wesens: 自己の生成と本質の頂点。この言葉には、人間存在に自然の本質の顕現を見、人間を全自然の進化発展の頂点として捉えようとするゲーテの人間観が窺われる。
25 der Neuere: 近代人。ここでは暗に、ドイツ・ロマン派の人々を指している。「解説」参照。
- 5 3 um ... zu ...: ここでは結果を示す。(例) Er begab sich zur Erholung ins Bad, um schon nach drei Wochen erkrankt zurückzukehren.
10 Warum ..., als weil ...: …という理由以外、なぜ…なのか。…であるのは、… (weil 以下) だからに他ならない。
10 jene handelnden Personen: handelnde Personen は、ドラマの「登場人物」の意。
- 17-19 『イタリヤ紀行』1787年5月17日、ヘルダー宛書簡参照。
- 6 5 der jenen eigene gesunde Sinn: jenen は指示代名詞複数3格。2行目の jene Naturen を指す。
28 ... sich zu zerstreuen, ... sich zu verlieren: この二つの zu 不定詞は、いずれも次の Gefahr の付加語。
29 kömmt: = kommt の古い別形。

[Heidnisches] この章で、ヴァインケルマンにおける異教精神を讃美して以来ゲーテはしばしば「老異教徒 (der alte Heide)」と呼ばれた。

- 7 17 die in dem hohen Werte des Nachruhms selbst wieder auf diese Welt angewiesene Zukunft: 「高い価値を有する死後の名声そのものによって、(彼岸ではなく)再びこの地上世界に属するものとされた未来」の意。
8 3 Sinnesart: = Art, anzuschauen, zu denken und zu streben.